

## 感謝を込めて

益城病院 副看護部長 小幡 祐子

国立競技場に「ピッピッピー」と長いホイッスルが響き、国立競技場は歓喜の渦に包まれた。帝京大学ラグビー部が日本一に輝いた瞬間である。周囲は総立ちになり私は思わず隣にいた彼の高校時代の監督と抱き合っただけ優勝の感動をかみ締めた。

息子が用意していた応援席はゲート真上の前列席。出場の瞬間や準備の段階から彼らの表情が見える距離である。エネルギーの高まり、興奮、緊張が伝わってくる。試合後半途中から「16」の背番号が出て行った。私は、思わず「神様お願いします。勝たせてください。」と手をあわせた。大舞台に出て行く緊張した表情は身震いさえ感じた。緊迫した時間帯である。必死に集中し楕円のボールを追っている。真剣勝負である。勝利の瞬間いつもそこにいることができるインパクトプレイヤー。

彼が「緊張と不安でいっぱい。点数も僅差だった。自分が失敗したらと思うと逃げたいという気持ちになった。」と応援席から見る表情からは想像もしなかった弱気な心の内を話してくれたのは最近のこと。

私たち親子はそこに立つことを夢に見ながら4年間を過ごした。「4年間の集大成の時、親を決勝戦に招待したい」という気持ちに迷いはなかった。一戦一戦で自分の持ち味を出し存在感をアピールすることが重要である。「何度修羅場を乗り越えてきたか。ぼんやりしている暇はなかった。」「全国から集められた選りすぐりの選手たちの中に無名の高校から入り、踏ん張って食い下がってきた。」と挑戦し続けた4年間を振り返る。部員数130人の中から22人しかピッチに立てないのである。レギュラー・ポジション争いは想像できる。

けっして恵まれた体ではないが高い目標を掲げ諦めずひたむきに頑張りその情熱を持ち続けた結果が夢を現実にすることができた。親子で追い続けた夢はこれで一応の区切りがついた。高校時代から応援し続けた仲間と近所の居酒屋で祝勝会を開いた。一人ひとりが応援し続けた熱い気持ちと感謝の言葉を口にした。「これで終わりではない。社会人ラグビーの応援もするぞ」とまだまだ応援は続きそうである。そして夢を諦めず国立まで連れてきてくれた息子に感謝の気持ちで一杯である。

大学生活の中では、ラグビーを通し人間関係や志を諦めずチャレンジする情熱を持

ち続けるスキルをたくさん学んだと思う。社会人になっても、学生時代に学んだことを宝として、何が社会に貢献できるか考えて前向きに元気で頑張っ欲しい。

いくつになっても親は応援団長を続ける。

